

# 幕末における「雑誌」誕生と啓蒙

——柳河春三『西洋雑誌』を中心に——

## はじめに

日本では幕末に新聞というメディアが登場し、その誕生からの歴史については、これまで様々な先行研究で取り上げられてきたが、雑誌については新聞の付随品のように扱われ、起源に関する研究は少ない。現代では容易に区別できる新聞と雑誌だが、揺籃期にはその境界は不明瞭であった。<sup>(1)</sup>当初から新聞は時事的情報を迅速に伝達するという明確な目標、存在意義があり、通史的研究のみならず個別研究も行われてきた一方で、雑誌研究に関しては十分に史的考察がなされてきたとは言い難い。雑誌という自覚の下に発行されたのは幕府直轄洋学所教授の柳河春三による『西洋雑誌』(一八六七)<sup>(2)</sup>が最初である、という尾佐竹猛の見解が定説になっているが、大概の先行研究はその事実確認のみで終わっている。<sup>(3)</sup>そもそも定義が不明な萌芽期の雑誌が幕末社会の中で如何に認知されていたか、と

いう問いに対して明確な解答を出すことは困難であり、雑誌という概念自体の曖昧さもそれを系統的、逐次的に見る視点の欠如につながったと考えられる。さらに当時の時代背景や社会的需要を考慮しなければ、その時期に雑誌が誕生した社会的意義を解明できないが、従前の研究では、その点を明示するための包括的視点も欠けていたと言える。

昨今、紙離れが取沙汰されるが、近世末期に日本が西洋の進んだ学問を受容するようになって以降、情報伝達、学問伝播を主導してきたのは紙媒体であり、雑誌もその一翼を担ってきた。新聞とは異なる性質を有し、新聞と分別して捉えられる以上、雑誌独自の存在価値もあるはずである。情報の重要性が増してきた幕末の社会を背景に、雑誌が果たした文化的・社会的機能、存在意義を再確認する上でも、雑誌の誕生に関する研究は肝要であると考ええる。そのため本稿では関係各誌を実際に分析した上で、体系的雑誌論の序説を提示することを試みるものである。

佐々木 千 恵

以上を踏まえ、「一」では新聞・雑誌の定義・差異を、先行研究を俯瞰しつつ考察する。「二」では滞清西洋人宣教師が刊行した雑誌の邦版を、日本における雑誌の準備段階として分析する。「三」ではそれに続き官板として出版されたオランダ雑誌の邦版が、如何なる点で清国雑誌の邦版から進化したかを探る。次に「四」ではそれらの不足点を満たす形で世に出された『西洋雑誌』の特徴を分析することで、日本独自の雑誌誕生の意義を探る。最後に「五」では『西洋雑誌』創刊の時代背景を庶民啓蒙という視点から探究する。

## 一 雑誌・新聞の区別と先行研究

雑誌の起源を探る際に問題になるのは新聞との関係で、先述のように草創期において両者の区別は明確でなかった。<sup>(6)</sup>江戸時代において海外情報は交流のあった清国、オランダから主に入手していたが、その「阿蘭陀風説書」は幕末開国後に、オランダのバタビヤ政庁発行『ヤーバツシュ・クラント』に引継がれた。その邦版『官板バタビヤ新聞』(一八六二)<sup>(7)</sup>が、日本における新聞の端緒としてしばしば言及される。さらに、西洋人宣教師により清国で発行された新聞が輸入・翻刻され、<sup>(8)</sup>官板として発行されて海外情報源となっていた。開国後、突如世界の舞台に立つことになった日本では、海外情報に対する需要が急遽高まり、さらに諸藩から情報開示の要求もあったことから、幕府は独占していた情報を刊行物として世に出す

ことにしたのである。よって官板としての刊行であり、ニュース伝播という明確な目標があった。そして輸入紙の翻訳、翻刻版が途絶えたのち、居留地横浜の英字新聞を翻訳筆写した新聞を、幕府内部のみで閲覧に供していた柳河春三が、情報を求める世の風潮に因って発行したのが『中外新聞』(一八六八)<sup>(9)</sup>であった。

このように時代の要請に因って幕末日本で新聞が発行されるようになったが、不定期の瓦版とは違う新聞の存在を周知させたのは福澤諭吉『西洋事情』(一八六六)<sup>(10)</sup>であろう。福澤は同書初編巻之一「新聞紙」<sup>(11)</sup>で定期刊行、迅速性という最大の特徴を挙げ、欧米渡航の際に実際に現地で見にした新聞の利便性を伝えた。上述のように清国、オランダから輸入した新聞の翻刻・翻訳版が官板として出版されたのは、迅速な出版には活版印刷設備及び相当な財力を要したためでもあった。半紙二ツ折で何日分もまとめた『官板バタビヤ新聞』<sup>(12)</sup>は冊子状で、<sup>(13)</sup>即時的でない点も新聞らしくないが、内容は時事的情報であった。新聞の性質は時代の変遷とともに変化するが、各種事典や先行研究を総括すると現代の新聞の主な特徴は、①定期刊行で発行頻度は主に日刊(特殊な例外を除く)、②主たる内容は時事的報道やその解説、③形態は無綴じ、と定義づけられる。

一方雑誌は「一定の編集方針のもとに種々の原稿を集め、ふつう週以上の間隔で定期的に刊行される、原則として仮綴じ冊子形態の出版物」<sup>(15)</sup>という現代的定義が示すように、①発行頻度は主に週刊や月刊、②時事性は求められず内容は多種多様、③仮綴じ、といった

新聞との差異がある。西田長寿も先述の尾佐竹猛と同様に『西洋雑誌』以前に雑誌というほどのものはなかったとしつつ、江戸時代の各種評判記や『柳多留』等も雑誌の先行と見られるし、オランダ、清国で発行された雑誌の邦版も存在していたと述べている。<sup>(17)</sup> 清国からの輸入定期刊行誌にはニュース記事と簡潔な学問的記事が併載されており、新聞と雑誌の中間的存在であったが、学問的記事の目新しさゆえに日本でも需要があったと考えられる。また学問的記事は多岐に亘る領域に及んでいるため、江戸時代の随筆等と似た雑文集の趣があった。後述のように、キリスト教的文言を削除するために、幕府が官板として出版するようになったが、当時はまだ雑誌という概念が周知のものでなかったため、雑誌というカテゴリーを明確に意識して刊行したわけではなかったと考えられる。ただ原誌が月刊なのでそれに従った結果、定期刊行というスタイルが浸透していったのであろう。

新聞と雑誌に関し、当初は境界線上の刊行物もあったが、時代とともに差異が顕在化し、相互に別物として認識されるようになった。定期性は新聞、雑誌の共通点であるが、時間間隔は概して雑誌のほうが長く、その時間間隔を最も有効に利用するために各々独自に発展したことも、<sup>(18)</sup> 双方が別個の媒体となった所以であろう。また、先述のように雑誌は江戸時代の随筆雑類がその基礎を培養しており、<sup>(19)</sup> 特定の趣旨に基づき記事を集める点では雑誌と江戸時代の随筆集との間に類似性が認められるが、随筆は定期的でないという点で雑誌

とは異なる。このように新聞や随筆など類似物と比較して初めて、萌芽期の雑誌の姿が浮かび上がってくる。

先述のように雑誌史に関する先行研究は少ないが、その数少ない先行研究は概して古く、数十年前から研究の進展がほとんど見られない点は看過すべきでない。雑誌の起源という論題が初めて取上げられたのは百年ほど前であるが、概要の提示のみであり、<sup>(20)</sup> 続いて昭和初期に雑誌誕生に関する概説が登場したが、やはり事実確認に留まっていた。<sup>(21)</sup> このように回顧的風潮の中で雑誌史がわずかに取り上げられて以降は、先述の西田長寿を除き雑誌史についての言及はなかった。ここで西田は明治初年から数年間を初期の「啓蒙雑誌時代」であると定義づけており、啓蒙<sup>(23)</sup> という機能を挙げたのが新しい視点であった。また、総括的雑誌論を著した永島寛一<sup>(24)</sup> は地理的条件や「鎖国」が日本の文化的後進性を招き欧州誌に約二百年遅れをとったと述べた上で、日本最初の雑誌は『西洋雑誌』だと記しているが、詳細な説明はない。その後は概説的ジャーナリズム史で<sup>(25)</sup> 『西洋雑誌』への言及がある程度で、目新しい進展はなかった。

内容の雑多性ゆえ雑誌の系統化は等閑視され、個別研究に力点が置かれる傾向にあったのも研究停滞の一因であると推察される。<sup>(26)</sup> そもそも雑誌と新聞・随筆等との境界が必ずしも明確でない以上、雑誌の始祖を探り単純に時系列で追うだけでは、あまり意味がないであろう。『西洋雑誌』が日本における雑誌の嚆矢であることが事実だとしても、それがどのような時代模様の中で、清国、オランダで

発行された雑誌から如何なる影響を受け、どのような点がそれらと異なるのかを考察することが肝要である。江戸時代に日本は「鎖国」でありながら清国、オランダからの情報流入は続いており、雑誌の誕生をめぐる状況を把握するためには、局所的視点でなく、東アジア文化圏の中での日本という、大局的な視点で当時の情報の流れを見る必要があると考えられる。

## 二 清国滞在西洋人宣教師による雑誌

先述の通り新聞・雑誌の区別は明確でないが、本稿では時事的記事とその他の記事の配分から山本文雄の類別に従い、『遐邇貫珍』、『六合叢談』、『中外襍誌』を萌芽期の雑誌として扱う。『遐邇貫珍』は日本では刊行されなかったが、『六合叢談』、『中外襍誌』は日本で安政～文久期に翻刻・刊行された。本来はこれらの雑誌が、清国人を布教に見合う知的水準に引き上げ、ことを目標に刊行された点に留意すべきである。西洋知識を紹介するのは科学伝播目的というより、むしろ清国人の伝統的天文学的知識、神と宇宙に関する誤った観念に対抗するためだ、と宣教師ミルンは語っている。これらが輸入先の日本でどのように役立てられ、どのような影響を及ぼしたか、という点を考察してゆく。<sup>(30)</sup>

『遐邇貫珍』<sup>(31)</sup>は写本により知識人の間で広く読まれたという。<sup>(32)</sup>西洋人が布教目的で清国に入国するのは一八四二年の南京条約による

英国への香港割譲以降であるが、その時に開かれた上海、寧波などの都市で布教活動が始まった。そうした中で、同誌は南京条約後初めて刊行された漢文紙であり、欧米人宣教師の文書伝道手段として後続誌に与えた影響は大きかった。ニュースや科学関係の記事が中心であり、この点では新聞と雑誌の境界線上にあったと言える。月刊で一二三四頁の冊子形、前半が西洋文明紹介の長論文、後半はニュースという構成で、長論文は政治・歴史から医学・地理・化学など多岐に亘った。<sup>(34)</sup>

『六合叢談』<sup>(35)</sup>は官板として日本で出版されているが、一八五七年一月から五八年六月にかけて発行された原誌は、宣教師たちが布教を志す際の副教材の形で広まり、種々の点で先行する『遐邇貫珍』を模範としている。第一号「小引」<sup>(36)</sup>には、新聞・雑誌といった定期刊行物の存在を説明した上で、内外の状況、各国の出来事、古今の歴史を記載し、毎月一編出すこと、天文地理から民間の事実に至るまで何でも掲載することが明記されている。西欧人の言う半開の民である清国人を啓蒙しようという狙いである。幅広い領域をカバーしようという姿勢は、『西洋雑誌』の趣旨説明に踏襲された。沈の統計によると計一五号、二三八葉のうち、非宗教の記事は一七〇・五葉、宗教の記事は五九・五葉となっており、約四分の一が日本版では削除された計算になる。キリスト教関係記事が多いことから、原誌をいち早く入手した幕府は自らの統制下に置いて日本版を出そうとしたのである。<sup>(38)</sup>同じ宣教目的の『遐邇貫珍』が統制しないうち

に広まってしまった前例を受け、今度は幕府が先手を打って宗教的表現を削除してから官板として刊行したと推察される。実物は半紙二ツ折縦横約二三×一五cm、一四〇二二丁程度の薄い冊子で、漢文に返り点と送り仮名を少々付けただけの全体として簡易な作りである。庶民向けというより、西洋知識を求める大名や幕府関係者、それに洋学者向けであろう。

概観して記事の中で目立つのは「地理」で一五号中一〇号に登場しており、一度も削除されていない。「水陸分界論、地震火山論」など「地理」と標記されているが地学に近い。その他、「海外偉人伝」など一連の西洋古代史や「西学説」と題する文化的な記事も啓蒙的役割を果たしている。それ以外に毎回出てくるのは、「近時」という世界各地のニュースである。泰西、印度、南洋、澳大利などの他、清国国内の記事もある。以上から考えると、この『官板六合叢談』は原誌編者ワイリーが言うように「総合誌」であり、啓蒙書、新聞と両方の性質を兼ね備えている。だが清国人読者に人気がなく、赤字経営であまり長続きせずに原誌は廃刊になったという<sup>(39)</sup>。それゆえ翻刻版もそう長続きはしなかった。

次に『官板六合叢談』廃刊と前後して一八六二年に発行された『官板中外襍誌』<sup>(40)</sup>を取り上げる。原誌は英国人宣教師マクガバンによる月刊紙で、宗教・科学・文学関連の記事が中心であるが、ニュースや経済記事も時折掲載したし、廃刊になっていた『遐邇貫珍』の記事を頻繁に転載した。転載記事が多いため『六合叢談』ほどの

独自性を認識されていないのか、同誌に関する研究は管見のところない。しかし内容を検討すると、新聞・雑誌の区分という点で同誌が一つの画期となることが分かり、看過すべきでない刊行物であると考ええる。この『官板中外襍誌』は原誌未発見のため、官板にする段階での削除箇所は知りえないが、キリスト教的記事が刪輯されているのは間違いない。官板として残っているのは一八六二年六月発行の第一号から同年十一月発行の第七号までで、第一号は原誌第一号の翻刻ではないらしく、発刊の辞もなく、いきなり記事から始まっている。六ヶ月で七号出ているので、官板でも月刊誌に近い間隔で発行されていたことが伺える。

記事に関し、ニュース記事と『遐邇貫珍』からの転載記事の頁数を調べると、表のようになる。そこから分かるように、「近事」は多いときでも半分以上で、次第に減少した。『遐邇貫珍』からの転載記事は一般教養的な内容で、四度に渡る「生物論」等であるが、次第に増加し、最終七号は全て転載記事で占められた。つまり、最初は『官			
	全体の頁数 (頁)	近事の頁数 と割合(%)	『遐邇貫珍』 からの転載 頁数と割合
一号	29.5	11(37%)	0(0%)
二号	50	23(46%)	0(0%)
三号	40.5	8.5(21%)	0(0%)
四号	41	9(22%)	10(24%)
五号	26	2(8%)	5(19%)
六号	19	1(5%)	10(53%)
七号	25	0(0%)	25(100%)
合計	231	54.5(24%)	50(22%)



板六合叢談』のように新聞・雑誌の中間的な性質だったが、最後にはニュースが消滅し純粋な雑誌となったのである。全七巻の内容を分析すると次のようになる。

①伝記・歴史（英、米国史等）七二頁（三一％）、②理科系（天文学系、生物の分類等）六九頁（三〇％）、③ニュース（米国の南北戦争、中国の太平天国の乱等）五四・五頁（二四％）、④世界各地の風俗等（ロンドンでの生活等）二二頁（九％）、⑤社会科学系（保険のしくみ）九・五頁（四％）。

以上のように伝記・歴史と理科系の記事がバランスよく掲載されていることが分かる。本誌は英国人宣教師による編集のため、英国史の占める割合が高く、風俗の記事も英国に関するものである。日本でこの『官板中外襍誌』が官板として出版されたのは、当時世界一の大国であった英国に関する知識・情報の収集という意図もあったと考えられる。また、世界史的な記事は多いが、世界各地の情報などいわゆる地理的内容はほとんどなく、この点に関しては当時の日本人の需要に合わない。本誌は約二三×一六cmで表紙は薄く無地、返り点のみで送り仮名もない漢文である。奥付に幕府御用達書肆である萬屋兵四郎の名が印字されているが、量販雑誌という趣はない。現在確認されている部数も『官板六合叢談』より少なく、恐らく知識層にしか配布しなかったと考えられる。『遐邇貫珍』を通し、西洋に関する簡潔な情報や学問的知識を雑誌により供与できることに気づいた幕府は、『六合叢談』、『中外襍誌』を官板で刊行した。し

かしこれらは教養雑誌の類であり、まずは知識層に西洋的な世界観を提示し、彼らの知的水準向上を狙ったのであろう。清国で宣教師が行なった、伝統的世界観の打破を、まずは幕府が知識層相手に試みたと言える。

### 三 『官板玉石志林』の雑誌的性質

一八五六年に洋学所が発足した時点で全国から卓越した洋学者が召集されたが、当初から第一人者と目されていたのが箕作阮甫であった。阮甫は数多くの洋書を翻訳し、洋学の発達ひいては日本における学問の発達に多大な貢献をした。官板を多く手掛けたことでも分かるように、洋学所員、幕臣として忠勤した。阮甫の活動時期は、幕府による洋学管理体制が確立し始めた頃であり、幕藩体制の揺らぎもまだそこまで激しくなかったという政治状況も手伝っていたと考えられる。一方、柳河春三の場合は正式に洋学所の教授になつたのが一八六四年で、幕藩体制が磐石でなくなりつつあった頃である。幕府が弱体化し、洋学所が担当していた洋学統制（草稿検閲）も頓挫しつつあることを、当事者なら十分感じていたであろう。そうした風潮に背中を押され、加えて日本が世界の舞台に登場する中で、知識人たちの中には自らの西洋知識を開示し、世のために役立てるべきだと考える者も出てきたと推察される。洋学所設立時に頭取の古賀謹一郎たちは、細微な点まで幕閣に伺いを立てつつ設立

準備を進めていた。慶応期には洋学所の教授陣はほぼ皆幕臣に取立てられていたが、日本国内の情勢も混沌とし、幕閣も洋学所に厳しく目を光らせる余裕はなくなっていたと考えられる。ゆえに、教授陣が自己判断で活動できる領域も広がっていたと推察される。柳河が翻訳者、校閲者などプロデューサー的立場で準官板<sup>(41)</sup>と言える書籍・雑誌の制作に励むようになったのには、そうした時代背景があった。

先述のように雑誌が日本で誕生した経緯について朝倉は「オランダの雑誌輸入とその解説」に始まると述べているが、その蘭字雑誌とは *Nederlandsch magazijn*<sup>(43)</sup>、邦題『荷蘭宝函』である。これは一八六三年ごろ『官板玉石志林』<sup>(44)</sup>として翻訳出版された。箕作阮甫を中心とする洋学所職員が翻訳したもので、内容は地理・気候・歴史・電気・工芸、海外事情、科学関係記事等、多岐に亘る。一八五七年には月刊雑誌として出版する計画があったが果たされず、<sup>(45)</sup> 訳稿が再編集されて書籍『官板玉石志林』として世に出た。<sup>(46)</sup> このように定期刊行誌として発刊されなかったのが雑誌と認識され難いが、原誌は雑誌であり、種々の無関係な記事の収集である点にその痕跡を残している。『官板六合叢談』、『官板中外襍誌』がそれより先に官板として出版されていたが、こちらは西洋の雑誌から西洋の情報を直接導入する形をとったのである。原誌は大衆向け雑誌であり布教目的ではない。原誌と比較してはいないがその意味で削除する必要はなかったと考えられる。同誌は約二五×一七cmほどで上記官板雑

誌より大判で、体裁は書籍である。一枚紙の裏表印刷で、一卷五〇丁近くあるため表紙には丈夫な紙が使用されている。活字も読みやすく和文調で、難読字は片仮名ルビ付きであり、読点も施され、固有名詞、普通名詞とも片仮名用語には線が引かれている。適宜挿絵が入るなど読み易さに対する配慮は先述の『官板六合叢談』、『官板中外襍誌』とは比較にならない。西洋知識の受け手の裾野拡大に配慮し始めたと推察される。

『官板玉石志林』の詳細な研究は管見の限り存在しないので、上記と同様に内容を分析すると以下ようになる。

- ① 世界各地の風俗等（熊猯、ロバレース等）一一六頁（三〇%）、<sup>(47)</sup>
- ② 伝記・歴史（ガリレオ、フランクリン等）一〇六頁（二七%）、
- ③ 地理関係（小笠原諸島、黒海等）九二頁（二三%）、④ 理科系（瑛瑯、北光等）五六頁（一四%）、⑤ 道徳的逸話（人を羨むことについて等）九頁（二%）。

世界各地の風俗、地理、歴史、及び理科系の知識等、互に関係のない記事が脈絡なく並んでいる。大半がオランダの雑誌『荷蘭宝函』から翻訳されたことは前述の通りだが、それ以外にもいくつかの雑誌や本から採録し、満遍なく多様なジャンルの知識を供与するように構成されている。また、欧州中心であるが、前述の『官板中外襍誌』と違い、様々な国に関する題材を採り上げている。原誌の年代は『荷蘭宝函』の場合は一八五五年が多いが、他の典拠の中で最古のものは一八二二年に遡る。つまり色々な典拠に当たり、有益

であると考えられる記事を採録したのであろう。そこに積極的な意志が感じられ、洋学者たちが目標に設定した知識レベルが伺える。主な原誌『荷蘭宝函』は現地では大衆紙であり、そこで一般に読まれているものを日本でも刊行することにより、日本人がもつ知識・情報量を欧米人のそれと近づけるという試みである。清国雑誌の邦版よりも読者層を広げようとしていると考えられるが、そこにやや無理があり、あまり初歩的とは言えない内容の記事も含まれている。同じくオランダ人発行による『官板バタビヤ新聞』に関しても同様のことが言えるが、これらはあくまでオランダ人向けであり、日本人の当時の知識水準が欧州人のそれに劣るのは仕方あるまい。創刊は『官板六合叢談』が一八五八、九年頃、それに続く『官板中外襟誌』が一八六二年、『官板玉石志林』が一八六三年、と相次いで発行されている。

#### 四 柳河春三の『西洋雑誌』

上記の輸入誌翻訳による官板雑誌刊行を経て、日本人が初めて発行した雑誌とされるのが、柳河春三編著『西洋雑誌』（一八六七―九<sup>49</sup>）である。柳河は洋学所教授で一八六三―七年に作成された翻訳筆写新聞の中心人物で、一八六二年の官板『英和対訳袖珍辞書』の編集にも参加している。さらに同年の『官板バタビヤ新聞』、『官板海外新聞』の発行にも参与していると考えられている。そうすると

同時期の『官板六合叢談』、『官板中外襟誌』の編集にも関わった可能性は否定できない。漢文雑誌の翻刻制作に関与することで雑誌とは何かを知り、雑誌創刊の構想を抱くようになったのではないだろうか。

不定期な時期もあったが、『西洋雑誌』は基本的に月刊誌であり、柳河は同誌創刊の辞で、「西洋諸国月々出版マガセイ 新聞紙の類の如く。広く天下の奇説を集めて。耳目を新にせんが為なれば。諸学科ハ勿論。百工の技芸に至るまで世の益となるべき事の訳説。宜く加入すべきものあらば。吝惜無く寄贈し玉へ。」<sup>50</sup>と述べて、同誌の趣旨説明をしている。学問的、実用的ならゆる知識を伝えようという意気込みが感じられるし、寄稿を募っている点も目新しい。「雑誌」という名称は江戸時代には随筆の題名として用いられたが、西洋の magazine の訳語として「志林」ではなく「雑誌」という言葉を取って用いたのは、先行した『官板玉石志林』との違いを打ち出し、新種の刊行物を出すという意思の現われと推察される。雑誌という存在はまだ周知のものでなかったが、ここで初めて海外雑誌に倣った、純粋に日本産の雑誌が登場したのである。

第一編刊行の一八六七年は『官板玉石志林』から四年後のことである。輸入雑誌の邦版が途切れた一八六四年は柳河が洋学所教授になった年であり、名実ともに教授陣を統轄できる立場に立った時であった。同誌は柳河の経営する書肆である開物社の刊行であるが、洋学所教授陣も寄稿するなど官板雑誌の穴を埋める準官板と言える。



同じく柳河発行の準官板『中外新聞』よりも創刊が早いので、「西洋諸国にハ新聞紙局ありて。公私の報告。市井の風説を集め。或は毎月。或ハ毎七日。或ハ毎日これを印行して。互に新報を得るを競ふ<sup>51)</sup>」と、まずは新聞の概念説明をしている。これはその前年に柳河の友人でもある福澤諭吉が出版した『西洋事情』から情報を得ていることは文言の類似により明らかである。さらに学問的知識を与える定期刊行誌の存在も次のように紹介する。「諸学科の社中にも。毎月出版の叢書ありて。新發明の説を泄さず集録し。速に同社に伝ふるを以て。學術の日々に開くる事極めて速なり。」これは今日で言う学術雑誌をイメージしたものと考えられる。そして、これから発刊するのは時事的な新聞とは違い、学問的、日常的知識の供給源であることを、「諸学科の新説ハさらなり。日用便宜の方法等を集めて。海内の同好に頒たんと欲す。」と伝える。

次に全部で六巻出ている『西洋雜誌』の内容を上記に倣い分析すると次のようになる。

①世界各国の紹介（西洋諸国帝王列伝等）五四頁（三三％）、②理科系（ダイヤモンド等）三七頁（二二％）、③世界各地の風俗等（曆酒の話等）三五頁（二二％）、④社会科学系（特許の話）一八頁（一一％）伝記・歴史（シーボルト等）一二頁（七％）、⑤道德的逸話（学問の大切さ）四頁（二％）。

やはり①③のように世界各国の紹介記事が多い。伝記などは割合少ないが、『官板中外雜誌』でも一度だけ取上げられた社会科学系

の記事が掲載されたことは注目に価する。洋学所教授職並神田孝平の巻四への寄稿であるが、恐らくこの雑誌のための書き下ろしで、特許についての本邦初の論文である。<sup>52)</sup>特許局開設の主張も含めた本格的論文で、後に神田も参加することになる明六社の『明六雑誌』の啓蒙の記事に類する、西洋紹介から一歩前進した内容である。もう一つ注目すべきは、巻一「国を富ますには先づ學術を開くべきの論」である。これは言わば同誌発刊の趣旨表明であり、恐らく柳河著（訳）である。まず「物産を開くことを以て富国の第一義とする」と富国の条件づけをするが、それには「無學無術」では「費多くて功少なし」と断言して「蒙」を否定し学問を推奨する。特に重学（機械学）と化学（分析学）を「専門書」で学ぶことを勧める。他にも「金石学、植物学、動物学、百工製造術」など実用的諸科学の重要性が力説され、新時代の学問的發展への指標が示されている。もう一つ別の意味で注目すべきは、巻三「万国曆元考略」で、西曆について説明する際に、「西洋諸国の教祖」として「キリスト」に言及している。肯定も否定もしてはいないが、柳河は幕府が禁止し続けているキリスト教に関し、それが西洋人の精神の根源にあることを敢えて隠そうとはしない。<sup>53)</sup>表層部分のみの西洋文化導入では真の西洋化は叶わない、という意識が根底にあったと推察される。

『官板中外雜誌』、『官板玉石志林』と比較して気付くのは、それらにはあまり見られなかった世界各国の現状、強弱関係といった記事の多さである。海外情報を渴望する日本人向け雑誌ならではの記

事選定と言える。一方、ニュースは皆無である。これまで翻訳筆写新聞を出すなど新聞という媒体について熟知していた柳河だからこそ、新聞とは別媒体である雑誌を作ろうと意識した上での編集である。『官板玉石志林』には寺子屋での学習経験しかない日本人には、理解し難い記事が掲載されていたことは先述の通りであるが、『西洋雑誌』では記事の種類を問わずほとんどの記事も、予備知識のない人々のために一から説明するという姿勢が見える。今後益々西洋の進んだ学問を導入するためには、知識層だけでなく庶民の知的水準の上昇も必要だと判断したのであろう。そのことは表記方法の違いにも表れている。先述のように『官板六合叢書』、『官板中外雜誌』では原誌の漢文に訓点を施しただけである。これは当時の知識層なら問題なく読めたであろうが、寺子屋で仮名読み教育しか受けていない庶民には難しい。これが『官板玉石志林』になると和文になり、『西洋雑誌』にも和文調が引継がれたが、こうした点にも編集側の想定読者層が伺われる。知識層でなくとも読めるよう内容、体裁とも工夫を凝らしていることは、先行雑誌類と比較検討することにより初めて認識することができた。

以上、官板として先に刊行された清国、オランダからの輸入雑誌の邦版、それを受けて日本人が発行した初の雑誌を内容・形態面から検討した。まず雑誌が存在していなかった日本に清国から輸入された雑誌が、科学的記事など雑多な記事を掲載する、新聞とは似て非なる定期刊行物のあることを知らせた。しかしキリスト教布教と

いう使命を帯びたものだったため、幕府は内部検閲をしてキリスト教関連箇所を削除してから発行した。翻刻する上に内容吟味・削除も加わり煩瑣な作業であった。オランダから輸入された雑誌はキリスト教にはあまり関係がないが、半世紀以上前の雑誌から採録した記事もあった。つまり日本人に知ってほしいと考える記事内容を、手間をかけて採集集積した結果の邦版であった。このように雑誌は短い文章で西洋の文物や進んだ学問を紹介するのに便利であったが、輸入誌をそのまま翻訳・翻刻するだけで出版することはできなかったのである。こうした編集作業をする中で、独自の雑誌の発行が模索されるようになったと考えられる。そのような経験を踏まえて誕生した『西洋雑誌』は、日本人の知的レベル、当時の日本人の興味・関心を把握しているからこそ創刊できた、日本人に照準を合わせた雑誌であった。

これまで見たように、日本人による雑誌は『西洋雑誌』創刊から始まるということが事実だとしても、外国誌からの流れ、さらには随筆的雑文集からの流れが一点に集約されて『西洋雑誌』が誕生した、とその経緯を明示すべきである。文化的諸要素は突然発生するものでなく、人々が継承し改変しつつ次世代へと伝えるものである。雑誌に関してもその前段階がなければ『西洋雑誌』は誕生しなかった。加えてその誕生時は、刊行物の読者が次第に増えてきた時期であった。幕府は洋学統制の目的で幕末に翻訳書の草稿検閲を行なったが、その規則が遵守されなかったこともあり、検閲だけに依存す

るのはやめて自ら官板を出版するようになった。<sup>(54)</sup> 雑誌出版の分野では、官板出版のための内部検閲から準官板雑誌発行という上記とは少し異なる経路を辿ったが、最初から全て幕府洋学所の管轄下で行われた。それだけ雑誌の利用価値が評価されていたのであろう。

## 五 雑誌が幕末の啓蒙に果たした役割

上記のように『西洋雑誌』は清国、オランダという江戸時代に交易のあった二国から輸入された雑誌を参考とし、庶民までを視野に入れていた。新聞・雑誌等ジャーナリズム発展の基礎には社会構造の変化、大衆社会の出現があるのは言うまでもない。<sup>(55)</sup> 当時の日本は、大衆社会が出現したとはまだ言えない状態であったが、開国し武士のみならず庶民の中にも知識や情報を求める者が増えてきた。柳河が『西洋雑誌』を発刊した際にも、読み易く幅広いテーマの記事を集めて人々に西洋に関する知識を提供する、という啓蒙意識がその根底にあった。だからこそ漢文に馴染みのない庶民までも、読者層に想定した作りになっているのである。柳河のその目的意識は『西洋雑誌』以前にも遡ることが著作類から伺える。初めてその萌芽が見られたのは一八六一年に出された『横浜繁盛記』<sup>(56)</sup>であろう。これは江戸時代の随筆の趣も残しているが、西洋に関する話題を呈しながら、西洋の文物や文化についての説明を織り交ぜている。タイトルにある横浜の紹介というよりはむしろ、日本人にはまだ馴染のな

い西洋の紹介をその趣旨とする。目次は以下のようにになっている。「蕃船入津」(三頁)、「蕃客学語」(三頁)、「港崎」(一二頁)、「洋人歌曲」(二頁)、「外蕃官吏」(四頁)、「舶来書籍」(二頁)、「洋画」(三頁)、「玻璃及金剛石」<sup>ビイドロ ジャマン</sup>(五頁)、「虎」(二頁)。

互いに内容的にあまり関連のない雑多な題目について手短に説明をしている点は『西洋雑誌』と似通う。結局刊行されたのはこの一編のみであったが、巻末に「近刻二編」と付記されており、二編が出る予定だったことが分かる。予告された二編の題目は「賽日曜日」<sup>カケイ</sup>、賭乗、軒珠盤<sup>クニツキ</sup>、将棋、自鳴琴<sup>オルゴール</sup>、写真鏡、電気器<sup>エシキアル</sup>、伝信機<sup>テレグラフ</sup>、馬車、踊舞、葬式、回祿<sup>クワジ</sup>、幻技<sup>マジナ</sup>、牛肉舗、酒食庖厨<sup>ラシヤウ</sup>、綿羊洋客之妾、付横浜地図」となっている。いずれも開国直後の段階ではまだ馴染みの薄い西洋の文物である。将棋(西洋)や写真鏡は後に独立した書籍として刊行されるが、<sup>(57)</sup> こうした多彩な項目から成る雑文集を継続して出す意図だったのであろう。福澤諭吉の『西洋事情』を先取りするような内容であるが、柳河著作中、最も早い時期に刊行された、啓蒙目的の雑誌の試作とも言える。

一方、『西洋雑誌』創刊の翌一八六八年に柳河は『万国新話』<sup>(58)</sup>を出版した。これは書籍や他者の海外見聞から得た様々な西洋知識を収集したものである。上記で挙げた諸誌を見ると雑誌は二〇丁前後、書籍は五〇丁前後が多い。その点で言えば、『万国新話』は書籍に類する。同書は三巻出版されており、各巻の題目は次のようになっている。

《卷一》英国飛脚賃の事、地下蒸気道、各国帝王賄料、「ガイホークス」の話、学校次第に盛なる話、有名諸国錢貨出入国債等の話、  
澳大利亜、市中取締の事

《卷二》各国議事院人数の表、新奇なる桴の話、貨幣製造局、学校  
各種の話、魯西亜の話

《卷三》希臘国、日耳曼変革の紀、日耳曼税会、阿片煙輸入の表、  
暹羅

ここでも無関係な記事を集めた点は雑誌に近い作りである。これまで見てきた『西洋雑誌』や輸入雑誌の邦版との大きな違いは、社会制度についての解説、紹介が主たる題材となった点である。それ以前は理科系の実用的記事や世界各国に関する紹介記事が中心であったが、地下鉄など英国の先端技術が驚きをもって詳述されているほか、議会、警察、郵便制度や各種学校（貧困者のため、職業訓練のための学校など）等が紹介され、福祉面の充実についての記述もある。新時代になって新たな社会制度を創出する必要性からその方面での知識供給が求められており、そうした時代の要請に応えた内容である。巻頭の言を見ると、それ以前のように海外の雑誌、書籍から記事を選択して翻訳・抄訳して書籍や雑誌に仕立てるという段階から、記者による一次情報をも載せる段階へと一歩進んだことが分かる。また、柳河は序文で今回掲載しきれなかった論文は追々掲載すると明言している。定期刊行の意図の有無は不明だが、雑誌の発行形態への意識が見て取れる。

上記『横浜繁盛記』、『万国新話』には定期性がなく雑誌ではないが、内容としては啓蒙を目論んだ『西洋雑誌』に類似している。さらに『横浜繁盛記』、『西洋雑誌』、『万国新話』と時代の流れに沿った内容面での変化が顕著である。単なる西洋の習慣・事物の紹介だったのが次第に社会制度についての話題が増加し、説明内容も複雑化している。西田は明治初年に発刊された雑誌を「啓蒙雑誌」と称したが、この名称は幕末の雑誌にも当てはまることが分かる。一八六八年に政権は交代したが、庶民の知識欲は幕末開国以降、益々旺盛になってきており、啓蒙活動は時代を超えて進展、活発化したのである。柳河著作を例に年代を追ってその変化の様子を見たが、一口に啓蒙と言っても時の経過とともに伝達内容が変化したのは、当時の急激に変貌する社会の推移を反映した所以である。

柳河の活動は一八七〇年にその死をもって終焉を迎えるが、幕末に種が蒔かれた啓蒙活動を、その後発展させた中心人物は福澤諭吉であろう。日本の近代化は外圧が契機となったため民衆は近代化を担う主体としての自覚を持つに至っておらず、啓蒙思想家も概して民衆啓蒙の意識が弱かったが、その中であって福澤は民衆啓蒙を強く意識していた、と植手は述べている。<sup>(60)</sup>先述のように柳河の雑誌など、幕末期にも庶民に対する啓蒙の兆しが見られたが、当時の大局的目標は単純に西洋を模倣し西洋に追いつくことであった。そのために寺子屋教育しか受けていなかった庶民に本格的な学問を授ける前提として、西洋に関する知識を与えること、世界の現状を知らせ



ることが求められた。それを主眼とする刊行物の代表と言えるのが福澤諭吉の『西洋事情』であろう。福澤自身「吾々洋学者流の目的は、唯西洋の事実を明にして日本国民の変通を促がし、一日も早く文明開化の門に入らしめんとするの一言のみ」と明言している<sup>(61)</sup>、そのために俗語で書いた「無学社会の指南<sup>(62)</sup>」であるとし、人々を啓蒙する意志を表明している。この『西洋事情』は一つのタイトルの下に纏められているが、巻相互に刊行年も隔たり、内容も幕末の初期啓蒙から明治啓蒙への変遷を象徴するかのように、簡単な西洋紹介から本格的な文明論へと移行している。『西洋事情』はもちろん雑誌ではないが、初編は種々の西洋文物の紹介を集めた雑文集で、『万国新話』に似た、雑誌に近似する書籍である。柳河の活動はこの初期啓蒙活動で終わってしまったが、『西洋事情』の続編に象徴されるように、その後の本格的啓蒙活動の土台形成に当たる活動であったと言える。その道具の一つとなったのが誕生間もない雑誌とそれに類する刊行物であった。

## おわりに

上記のように、文明論に行き着く前の西洋紹介が、幕末から明治初頭にかけての初期啓蒙の中心的課題であり、それを伝播する役割を果たすために雑誌という形態が徐々に確立したとも言えるし、逆に誕生しつづあった雑誌がタイミングよくその役割を果たしたとも

言えるであろう。開国直後の社会において、揺籃期の雑誌の長所は、①読書習慣が無い人々に、多様な題材を手短に平易な表現、内容で提供できる、②読者は興味をもった記事だけ読み、その後の読書につなげたり実用に役立てたりすることができる、③定期的に発行することで、その時々需要に合う内容を次々と採録することができる、と概括できる。新聞のような時事性、迅速性は求められないが、書籍にはない回転の速さゆえに、時々要請に応じて新知識を供与できた。啓蒙記事が望まれたのは開国後の短期間であり、誕生したばかりの雑誌は明治初頭までその社会的要請に応えたのである。明治期の雑誌の始まりといえば一八七四年の『明六雑誌』が挙げられるが、そこで取り上げられる新たな社会構築のための諸議論は、幕末の誕生間もない雑誌にその萌芽を見ることができた。初期啓蒙雑誌はその役割を終えたのち、明治期になって種々の分野の、異なる役割を担った雑誌へと分化、発展してゆく。幕末に新しく誕生した雑誌という形態は、啓蒙が求められる時代に適合する媒体だったのである。

本論では従前の雑誌史では見えてこなかった雑誌誕生までの経緯、その社会的役割を提示した。清国で西洋人宣教師が試みた啓蒙活動を幕末日本では日本人洋学者が試みたが、その際、清国・オランダの刊行物を模範として西洋知識を取り入れた。その媒体の一つとして用いられたのが雑誌であった。最初の雑誌出版者である柳河は、著述家、翻訳家、編集者、書肆として啓蒙に尽力したが、洋学所教



授であり、所員たちの著作物を管理できる立場にいたことが、編集を真髓とする雑誌制作にとって好都合であった。本稿で取上げた幕末諸誌の詳細な内容検討や、福澤を始めとする明治啓蒙との比較検討については別稿で扱いたい。

## 注

- (1) 幕末の時点では新聞、雑誌の区別は未確定だが、本稿では萌芽期の新聞、雑誌を含めて括弧無しで表記する。
- (2) 木村毅『現代ジャナリズム研究』（公人書房、一九三三）一六〇—一頁によると、これは日本に限ったことではないという。
- (3) 幕府直轄洋学所は蕃書調所、洋書調所、開成所と名称変更したが、本稿では洋学所で統一する。
- (4) 尾佐竹猛『西洋雑誌』解題』（『明治文化全集 第五巻雑誌篇』明治文化研究会編、日本評論社、一九五五）八頁。
- (5) 吉田則昭『雑誌文化と戦後の日本社会』（『雑誌メディアの文化史』吉田則昭編、森話社、二〇一二）一四頁では、メディアの歴史を問う際には創刊年月を記すだけでなく、なぜある時点で創刊され、どう変化したか、なぜその変化が起きたか過去へ問いかけることが重要だと述べられている。
- (6) 岡野他家夫『日本出版文化史』（春歩堂、一九五九）五二頁には、明治初年においてすら新聞・雑誌が切り離せない密接な関係にあると記されている。
- (7) 岡野他家夫『新聞学』（日本大学、刊行年不詳）四頁、等。
- (8) 『官板中外新報』、『官板香港新聞』等だが、漢文に訓点を打って日本版を制作することは和刻とも言うが、本稿では翻刻で統一する。
- (9) 以上のような経緯が新聞史上では半ば定説になっている。鈴木秀三郎『本邦新聞の起源』（クリオ社、一九五九）、小野秀雄『新聞の歴史』（東京

- 堂、一九六一）、西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』（至文堂、一九六一）、同『日本ジャーナリズム史研究』（みすず書房、一九八九）、山本文雄『日本マス・コミュニケーション史（増補）』（東海大学出版会、一九八三）等。
- (10) 西洋文明と欧米五カ国の紹介書。初編は一八六六年、外編は六八年、二編は七〇年刊。

- (11) 福澤諭吉『福澤諭吉全集 第一巻』（岩波書店、一九五八）三〇四—五頁。
- (12) 早稲田大学中央図書館貴重書庫所蔵、請求番号文庫一〇一七三六二。
- (13) 長い時で原紙発行から日本版発行まで五ヶ月以上、名称が変わった『海外新聞』では八ヶ月以上の間隔があった。
- (14) 本稿では特定分野に特化しない雑誌を対象とする。特定の分野に関するものなら、例えば箕作阮甫編訳『泰西名医彙講』（一八三六）は医学系学術雑誌の走りとも言えるが、定期性の意図が伺えない点で雑誌と呼ぶことは難しい。
- (15) 出版事典編集委員会編『出版事典』（出版ニュース社、一九七一）。
- (16) 西田長寿『明治初期雑誌について』（前掲『明治文化全集 第五巻雑誌篇』）二頁。
- (17) この点に関しては朝倉治彦『幕末明治における新聞・雑誌の発生異見』（『四日市大学論集』第一巻第一・二合併号、四日市大学、一九八九）等も同様の見解である。
- (18) 永島寛一『雑誌論入門』（吾妻書房、一九六七）一四頁。
- (19) 前掲『明治初期雑誌について』二頁、前掲『日本マス・コミュニケーション史（増補）』八頁、前掲『幕末明治における新聞・雑誌の発生異見』二〇頁。
- (20) 神長倉生『雑誌の歴史』（『日本一』第四巻第五号、南北社、一九一八）、千葉亀雄『新聞雑誌の発達』（『解放 十月特大号明治文化の研究』第三巻第十号、大鑑閣、一九二一）。
- (21) 小野秀雄『我邦新聞雑誌発達の概観』（『太陽創業四〇周年記念増刊 明治大正の文化』第三三巻第八号、博文館、一九二七）三七九—八一頁、松

井史亭「明治大正新聞雑誌発達の概況」(『明治大正史 第五卷国勢篇』明治大正史刊行会、実業之世界社、一九二九) 八一九頁、前掲『現代ジャーナリズム研究』一五六―七頁。

(22) 前掲「明治初期雑誌について」二頁。

(23) 本稿で「啓蒙」という用語は「広く民衆の知識を啓発し、個人としての自覚と自発的能動性を高めようとする思想」をさす一般的概念として用いる。参照：植手通有「日本近代思想の形成」(岩波書店、一九七三) 一一頁。

(24) 前掲『雑誌論入門』三三頁。

(25) 土屋礼子『日本マスメディア史年表』(吉川弘文館、二〇一八) 等。

(26) 大澤聡「編輯」と「総合」研究領域としての雑誌メディア(前掲『雑誌メディアの文化史』) 四二―三頁では、雑誌研究に関し、その内容的不統一性により研究者の関心・力能に依存し、個人芸の私域を超脱せず、分析方針の共有を欠き、個別のケース調査のみが蓄積している点が構造的課題だと評されている。

(27) 前掲『日本マス・コミュニケーション史(増補)』七―八頁。

(28) 『遐邇貫珍』、『六合叢談』に関しては次のような先行研究がある。卓南生「『遐邇貫珍』(一八五三―一八五六) 香港最初の華字月刊紙についての考察」(『応用社会学研究』第一九号、立教大学社会学部、一九七八)、同「六合叢談」(一八五七―一八五八) 上海最初の華字月刊紙についての考察」(『応用社会学研究』第二三号、立教大学社会学部、一九八二)、同「解説 官板華字新聞及び中国語原紙について」(北根豊編『日本初期新聞全集 編年複製版一』ベリカン社、一九八六)、吉田寅「宣教師刊行中国語の刊行誌の中国版と日本版『六合叢談』の史料の考察」(『立正史学』第八二号、立正大学史学会、一九九七)、沈国威編『六合叢談』(一八五七―一八五八)の学際的研究 付・語彙索引／影印本文」(白帝社、一九九九) 等。

(29) 先行する雑誌『祭世俗毎月統記伝』(一八五一―一八五二、マラッカで刊行)の編集者。William Milne (米憐) 一七八五―一八二二、ロンドン伝道協

会宣教師。

(30) 卷末の資料一参照。

(31) 一八五三―一八六〇年に香港でメドハースト Walter Henry Medhurst 漢名「麦都思」が刊行。ヒリヤー(当時香港植民地政府の最高法官)、レック(香港英華学堂校長)が引継いだ。早稲田大学中央図書館貴重書庫所蔵、請求番号文庫八C一―一九に「宇田川氏家蔵」と書かれた写本で、六丁の小冊子(約一九×一四cm)がある。

(32) 卓南生「寧波における最初の近代華字新聞『中外新報』(一八五四―一八六〇)とその日本版についての研究」(『国際社会文化研究所紀要』第九号、龍谷大学国際文化学部、二〇〇七) 一三四頁によると、当時日本で筆写された華字紙のうち最も広く流布し写本も多いのがこの『遐邇貫珍』だという。

(33) 沈国威、内田康市編『近代啓蒙の足跡 東西分科交流と言語接触：「智環啓蒙熟課初歩」の研究 関西大学東西学術研究所研究叢刊一九』(関西大学出版部、二〇〇二) 八二頁。

(34) 前掲『遐邇貫珍』(一八五三―一八五六) 香港最初の華字月刊紙についての考察」一五〇―三頁。

(35) 原誌は上海墨海書院刊行。主導者は英国倫敦会派遣のワイリー Alexander Wylie 漢名「偉烈重力」。官板は早稲田大学中央図書館古書資料庫所蔵、請求番号ルー二九四四、同貴重書庫所蔵、請求番号イ八―二四九。卓、沈、吉田の先行研究は注二六参照。他に小野秀雄「翻刻新聞雑誌の原書について」(『新聞学評論』第一号、日本新聞学会、一九五二年)。

(36) 北根豊編『日本初期新聞全集 編年複製版一』(ベリカン社、一九八六年) 一頁。原誌が翻刻されている。

(37) 前掲『六合叢談』(一八五七―一八五八)の学際的研究 付・語彙索引／影印本文」研究篇一八―二七頁。

(38) 前掲『六合叢談』(一八五七―一八五八)の学際的研究 付・語彙索引／影印本文」解題三五頁。

- (39) 前掲『寧波における最初の近代華字新聞「中外新報」(一八五四—六二)とその日本版についての研究』一三一頁。
- (40) 原誌は一八六二—八年に上海で英国倫敦宣教師マクガバン John MacGowan 漢名「麥嘉湖」が刊行。官板は早稲田大学中央図書館古書史料庫所蔵、請求番号イ七一三三二。北根豊編『日本初期新聞全集 編年複製版 二』(ペリカン社、一九八六年)には七号全部の縮刷と一部のみ和訳が掲載されている。
- (41) 官板ではないが、幕府直轄洋学所の教授陣がテキスト用として執筆するなど官板と似た役割を果たすものを、本稿では準官板と呼ぶ。幕末に次第に増加する傾向にあった。
- (42) 前掲『幕末明治における新聞・雑誌の発生異見』一九五頁。
- (43) 十九世紀初頭にロンドンで評判だった「ペニーマガジン」を模倣してアムステルダムで刊行された廉価かつ有益を看板とする大衆向け知識啓蒙月刊誌。一八三四—八五年。(参考：日蘭学会編『洋学史事典』雄松堂出版、一九八四、「ネーデルランツセ・マガゼイン」)。
- (44) 早稲田大学中央図書館古書資料庫所蔵、請求番号イ四—三二六五。
- (45) 主導者であった古賀謹一郎が異動になったため月刊誌発行計画が頓挫したと推察される。
- (46) 前掲『洋学史事典』二二八—九頁。
- (47) この割合は四巻全体三九五頁に占める割合を示す。
- (48) 『官板バタビヤ新聞』の記事は初心者向けの説明も少なく、日本の庶民向けにしてはやや難解だと思われる。
- (49) 柳河春三編著、槌田満文解説『西洋雑誌 柳河春三資料』(湖北社、一九八五年)。原本は早稲田大学中央図書館貴重書庫所蔵、請求番号イ七一八二。
- (50) 前掲『西洋雑誌 柳河春三資料』三四—五頁。旧字は新字に改めた。以下同様。
- (51) 前掲『西洋雑誌 柳河春三資料』二頁の巻一の序。以下同様。
- (52) 特許については福澤諭吉『西洋事情』にも掲載されているが、神田論文のほうが先に発表された可能性が高いと槌田氏は述べている(槌田満文『柳河春三資料解説』前掲『西洋雑誌 柳河春三資料』一九五頁)。
- (53) 他にも柳河は中国舶来書『智環啓蒙』を、キリスト教について説明した部分を全く削除せずに翻刻・出版した。
- (54) この点については拙論文「幕末維新期における洋学統制と啓蒙活動 洋学所における書籍検閲・官板出版と柳河春三による啓蒙活動」(修士論文、二〇一八)で論じた。
- (55) 前掲『雑誌論入門』一二二頁。
- (56) 早稲田大学中央図書館古書資料庫所蔵、請求番号ラ六一三二六六。大きさは『官板六合叢談』、『西洋雑誌』とほぼ同じである。前掲『近代啓蒙の足跡 東西文化交流と言語接触・「智環啓蒙熟課初歩」の研究』、八耳俊文「アヘン戦争以後の漢訳西洋科学書の成立と日本への影響」(『日中文化交流史叢書八 科学技術』吉田忠他編、大修館書店、一九九八)に「舶来書籍の一部への言及があるが、その他に先行研究はない。
- (57) 『西洋将棋指南』(一八六九)、『写真鏡図説』(一八七〇)。
- (58) 早稲田大学中央図書館貴重書庫所蔵、請求番号文庫八一C三〇七。約一八×一二cmで『西洋雑誌』とほぼ同じ大きさである。巻一は二六丁、巻二は二四丁、巻三は未見。
- (59) 前掲『明治初期雑誌について』二頁。
- (60) 前掲『日本近代思想の形成』一六八頁。
- (61) 前掲『西洋事情』二三頁。
- (62) 前掲『西洋事情』二九頁。

《資料一》 幕末各種新聞・雑誌発行期間													
	1854	1855	1856	1857	1858	1859	1860	1861	1862	1863	1864	1865	1868
中外新報	5				㊦→ —㊦		2						
香港新聞				11				⑫→⑤			⑧		
官板バタビヤ新聞								①②					
官板海外新聞									⑧ ⑨				
日本貿易新聞										③→④			
日本新聞											⑦→	→⑤	
中外新聞													②→⑥
週週實珍													
官板六合叢談			1		6→㊦?				—㊦?				
官板中外雜誌									⑥→⑪				
官板玉石志林										⑨			
西洋雑誌													⑩→⑭

参考：北根豊編『日本初開新聞全集 編年複製版一～四』（ぺりかん社、一九八六～七七年）、田嶋学会『洋学史事典』（雄松堂書店、一九八四年）、『幕末明治新聞全集』巻一、二、（世界文庫、一九六一年）。その他卓南生、吉田真、小野秀雄、汎国威の関連文献、表の灰色欄は原紙（誌）が清国あるいはオランダで発行されていた期間を示す。欄中の数字は現地での創刊月及び停刊月、丸囲み数字は日本版の創刊月及び停刊月。数字非表示は月が不明の場合。㊦は月が不明で年のみを表す。『官板玉石志林』は雑誌ではないが原紙を雑誌であり当初雑誌として刊行予定であった。